
死神トーク

斎藤佑祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神トーク

【コード】

N0834X

【作者名】

斎藤佑祐

【あらすじ】

死神3人？ のトーク。

(前書き)

会話が書きたかったのです。
設定は意味ないです。

マルシエは屋上の縁に立ち、地面を指差す。

マルシエ

「落ちた」

チアル

「落としたの間違いじゃない？」

マルシエ

「いや、落ちたんだだよ。僕は何もしてない。ただ見守っていただけさ。落ち行く様を、血が流れる様を」

チアル

「でも人間ってホント馬鹿よね。わざわざこんなに痛いことして死ななくもいいのに。巻き添えになった人間って知ってる？ 彼女ね、今日が初めてのデートの日だったの。朝から楽しそうで。まったく死ぬならもっと綺麗に死ねればよかったのに」

マルシエ

「悪い人間ではなかった。面倒な奴ではあったけどね。巻き添えをくった彼女は本当に運がないね。もしこの世を司る神がもっとマシならまともな死に方をしたかな」

チアル

「何も変わらない。結局は死ぬわ」

マルシエ

「死なない人間はいない。死神はそこまで職務怠慢僕たちではないか」

チアル

「あなたが言うこと？」

マルシエ

「ふふっ、これは手厳しい。なあクラスト、そうは思わないか？」

クラストは無言のまま立ち上がる。二人を見ることなくビルの縁へ歩き飛び降りる。

下には血の海と二人分の人を模ったテープ。警察と野次馬。クラストは血の海の上へふわりと立ち降りる。

チアル

「あれでいいの？」

マルシエ

「『あれで』って？」

チアル

「ああいう態度よ」

マルシエ

「多感な年頃なんだよ」

チアル

「でも、」

マルシエ

「起きるべきときに物事は起きる。それを楽しむことは有意義な行

為だと思わないかい？ タネを知ってるマジックショーなんて誰も見に行かない。事情の知れた出来事なんて体感する価値もない」

チアル

「他人事なのね」

マルシエ

「他人事だよ。僕たちはそういう存在じゃないか」

チアル

「……そうね。私も行くわ。さようなら」

マルシエ

「さようなら」

チアルはマルシエに背を向け扉に向かって歩き出す。
マルシエは一人で笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0834x/>

死神トーク

2011年10月9日15時45分発行